

日本社会情報学会合同研究発表大会
シンポジウム
「今、あらためて社会情報学を問う」

社会情報学の周縁から

2006年9月12日
木村 忠正

東京大学大学院・総合文化研究科

<http://www.ne.jp/asahi/kiitos/tdms/hp.j.html>

1

本報告の主旨

- 文化人類学という社会情報学の周縁に位置する立場から、社会情報学の理論と方法について、次の問い掛けを行いたい
- 理論:社会情報学は、科学技術論と今後どのような対話を持ちうるのだろうか?
- 方法:サイバースペースのエスノグラフィーについての議論・検討が今後一層必要とされるのではないか?

2

文化人類学と「情報化」

- 1990年代からのインターネット、モバイルなど新たなICTの革新に伴う社会文化変動についての関心
- Escobar, Arturo
 - 1993 Welcome to Cyberia: notes on the anthropology of cyberculture. *Curr. Anthropol.* 35:211-31 20.
- Appadurai, Arjun
 - 1996 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. University of Minnesota Press

3

computing in anthropology vs. computing anthropology

- 文化人類学における情報化への関心は、1980年代におけるコンピュータの進展にもみられる
- 大きく2つの方向性
- コンピュータ技術を人類学の研究、教育に役立てようとする方向性 (computing in anthropology)
- コンピュータが開発され、社会に組み込まれていく過程をエスノグラフィーの観点から調査研究する方向性 (computing anthropology) (Bryan Pfaffenberger, David Hakken, Lucy Suchman, Julian Orrなど)

4

科学技術研究の一翼として

- 人類学には、民俗科学 (ethnoscience)、テクネー (techne; 技術知)、物質文化研究の流れが存在
- computing研究もまた、科学技術と社会研究、高度技術と社会研究の一翼としての位置づけに
- 米人類学会 (AAA) には、Committee on Computing as a Cultural Process が80年代設置され、90年代には、Committee on the Anthropology of Science, Technology, and Computing (CASTAC) へと発展

5

STS・科学技術人類学の勃興

- 1980年代以降、科学知識社会学・科学論、技術史、科学史・科学哲学、science, technology and society、科学技術と公共政策など、STS (Science (and technology) studies) 領域が拡大
- 人類学においても、Bruno Latour, Michel Callonらによる、ANT (Actor-network Theory) を起爆剤として、科学(技術)人類学と呼ばれる分野が勃興

6

anthropological research of technoscience studies

- Bruno Latour, Steve Woolgar, Michel Callonらlaboratory studies, ANT
- Karin Knorr-Cetina, Sharon Traweekらハイテク研究, Epistemic Cultures
- Donna Haraway, Emily Martin, Joseph Dumit, David Hakkenなど, cyborg anthropologyの提起(テクノロジーの展開により人類と機械との共棲的融合体が生起, 拡大しているとの問題意識)
など, いくつかの方向性

7

科学技術論との対話(1)

- 日本の社会情報学は, きわめて広汎な学術的関心を持ち, 多種多様な領域が関わって発展
- しかし, 科学技術論とはこれまであまり積極的な接点・交流はみられないように思われる
- もちろん, 社会情報学として, 固有の多種多様な研究課題があることはいまでもない
- だが同時に, 情報通信技術が無条件に特権化するのではなく, 他の高度技術と社会制度, 人々の行動様式, 価値体系との関係において議論を発展させる必要性もあるのでは?

8

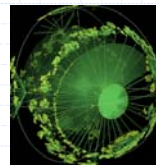
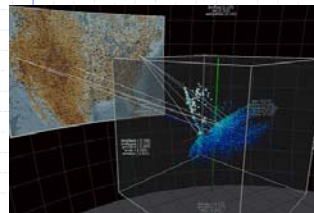
科学技術論との対話(2)

- 情報通信技術が現代の高度技術にとって基盤技術となっていること, その意味で, 社会情報が現代社会, 高度技術社会を分析する上で, 不可欠の要素であることもまた確か
- 一方で, バイオIT, ナノテク, NC(数値制御)工作機械, Web2.0, モバ友などを, すべて「情報」の問題とすることは, かえって「(社会)情報」の説明力を減減させることになる
- 他方, 情報と他の技術とが結びつき, それが社会的過程に組み込まれるダイナミクスを捉える研究の方向性も不可欠では?(たとえば, 女性とテクノサイエンス)

9

科学技術人類学における「情報社会」概念への疑念

- Hakkenは, “Cyborgs @ Cyberspace: An Ethnographer Looks at the Future.” 1999, “The Knowledge Landscapes of Cyberspace.” 2003を通して, 「情報社会」概念への批判を展開



10

「情報社会論」の問題点(1)

- 「情報社会」という概念の歴史的位置づけ
 - ビジネス, 経済・経営学, 社会システム工学を中心に, 「IT革命」「情報革命」と, その「革新性」に焦点
 - ITがこれまでと質的に異なる社会に変革するという主張は, あまりに安易な技術決定論
 - 「断絶」「革新」という言説に頼らず, ITと社会の関係を語る言語が求められている

11

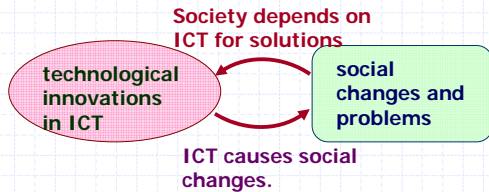
「情報社会論」の問題点(2)

- 「サイバースペース」を共時的な軸において「革新的」と捉えることによる問題
 - ITによって作り出されるサイバースペースが, 従来の物理的時空間と異なる特性を持つことはたしか
 - しかし, サイバースペースの形成, 発展と日々更新されるダイナミクスは, 従来の社会的空間に生息し, 無数の意図を持ったヒトが介在することで初めて成立

12

「情報社会論」の問題点(3)

- 技術決定論(“computopian”)と批判的議論(“compputopian”)のもつ同型性
 - 佐藤俊樹「情報化社会論のパラドクス」
 - 情報技術には、奇妙な「二重性」「再帰性」が存在する



13

「情報社会論」の問題点(4)

- 「情報社会」の「斉一性」仮説(uniformity hypothesis)あるいはethnocentrism
 - 情報通信技術、IT技術の普遍性、グローバル性
 - ⇒少なくとも主要産業国に関して、同じような社会が実現すると暗黙裡に想定されがち(欧米中心主義(ethnocentrism)的措置)
 - しかし、「情報社会」(information society)は単数形ではなく、複数形(information societies)として考えられるべき

14

Cyber Ethnography の必要性

- 社会情報学において、オンライン/オフラインでの人々の行動に関するエスノグラフィー的アプローチを一層発展させていくことが望まれるのではないか？
- デジタルネットワークは、調査対象としてのみならず、調査方法、分析手法の面でも大きな変化をもたらしてきた
 - ログ取得をはじめとする人々のオンライン行動を記録することの容易性
 - データがデジタル化されていること(蓄積、参照、検索、分析操作加工、グラフ化、統計・モデリング活用など)
 - 複雑系、ゲーム理論や数理行動科学分野の発展
- 実験的状况、ログ解析、トラフィック分析、ハイパーリンク・トラックバック分析、情報行動に関する社会調査、利用者へのインタビュー調査などが中心で、エスノグラフィカルな調査研究は未開拓

15

文化人類学とエスノグラフィー

- エスノグラフィー(ethnography): その字義に従えば、民族(ethnos)について記述したもの(graphy)、「民族誌」
- ただ、文化人類学において、エスノグラフィーは、参与観察(participant observation)にもとづく調査研究活動(フィールドワーク)を行い、成果をまとめ、公表するプロセス、方法を総称する概念としても用いられる
- エスノグラフィーは、文化人類学が、比較的小規模で、行動規範・様式、価値体系などを共有している人々の集団を対象に、中長期に渡り滞在し、社会組織・制度、対人関係、政治、経済、環境など多次的要素をできるかぎり包括的に取り扱い、提示しようとする研究領域として発展してきたことに多くを負っている
- 中長期にわたるフィールドワークにもとづき、多様な要因が複雑に絡まりあう社会文化的動態を解きほぐし、記述する手法として、エスノグラフィーという手法が不可欠

16

文化人類学におけるエスノグラフィー革新の必要性

- 文化人類学自身において、エスノグラフィー、エスノグラフィー的表象・実践に対する強い反省は、1980年代後半から顕著に
- エスノグラファー(著者)を特権化することへの疑義⇒ multivocal/multi-audience-addressed texts
- 社会、コミュニティ、人々の流動化、ディアスポラ化、クレオール化 ⇒ multilocal/multisited ethnography
- 人類学的言説・知識への再帰的省察 ⇒ situatedness of knowledge, interventions within a stream of representations, mediations, and unequally inflected discourses competing for hegemonic control
- サイバースペースの拡大は、いずれの側面にも強く関与

17

Cyber Ethnography ~2つのプログラム~

- オンライン活動に閉じたプログラム
 - オンラインとオフラインを含みこんだ人々の社会的活動を対象とするプログラム
- いずれも、サイバーエスノグラフィの基盤となるオンラインフィールドワークに大きな課題

18

「オンラインフィールドワーク」

■ オンラインゲームの「フィールドワーク」を想定してみると...

- オンラインでのインフォーマントとの関係醸成
- グループインタビュー(チャットやBBS利用)
- 参与観察

など、これまでのエスノグラフィーのフィールドワークに対応したものを想定できなくはない

■ しかし、「フィールド」「コミュニティ」「インフォーマント」の妥当性は、小規模社会で間主観的実在空間が比較的安定的にみえるこれまでのコミュニティとはまったく異なる

19

オンラインフィールドワークにおける ダブルバインド

■ オンラインコミュニケーション活動を研究しようとする場合、参与観察、信頼関係の醸成は、活動そのものに大きな影響を与えてしまう

■ 人類学者が参与観察を通して、メンバーとの間に信頼関係を形成したとすれば、それは、その人類学者が間主観的実在空間を規定するノードとして機能してしまっていることであり、控えめに振舞えば、十分な参与観察データを収集することができないというダブルバインド状態におかれる

■ さらに、オンラインフィールドワークでは、エスノグラフィーで大きな問題となる「倫理」が一層重要に

20

方法論発展の必要性

■ ここまでみてきたように、オンラインフィールドワーク、サイバーエスノグラフィーに関しては、まだ方法論とそれに関連した理論上の問題が山積している

■ 報告者は、こうした問題に取り組み、社会情報学のさらなる展開に寄与していくことができればと考えている

21

■ ご清聴ありがとうございました m(_ _)m

■ このプレゼン資料は、
http://www.ne.jp/asahi/kiitos/toms/pdf/20060912jasi_jsis.pdf
にアップロードしております。

22